和也は、これから訪れる地獄の窒息に備えるように、教室の空気を最後の一息まで肺の奥深くに溜め込むべく、思い切り吸い込みました。

そして、覚悟を決めた、あるいは全てを諦めた虚ろな絶望を瞳に宿します。目の前を覆い尽くす肉厚で巨大な結衣のお尻の真ん中に、自らその顔を深く突き入れたのです。

ググッ……

鼻先が肉厚な弾力に沈み込み、続いて唇が、そして顔全体が結衣の重厚な肉の壁の中に完全に埋没していきます。和也は自らの手で彼女の太腿を強く引き寄せ、鼻も口も、一点の隙間もなく塞がれるまで顔を押し当て続けました。視界は一瞬で暗転し、完全な闇が訪れます。

自らの手で酸素を遮断し、支配者の圧倒的な質量の中に沈んでいく恐怖に全身を震わせながらも、和也は絶対に顔を離すまいと、自分を窒息させるその巨大なお尻に必死にしがみつき続けたのです。

……

……。

数十秒と経たないうちに、肺に残った酸素が枯渇し、脳の危険信号が点滅し始めます。心臓の鼓動が耳元で大きく鳴り響きました。

（…苦しい…！）

「離れたらボロボロにされる」という恐怖で必死に耐えますが、生存本能はそれを上回る「死」の恐怖を告げていました。

（……くる、しい……。苦しいよ……っ！！　空気が……空気が、ほしい……！！）

徐々に限界が近づくにつれ、和也の心は折れていきます。